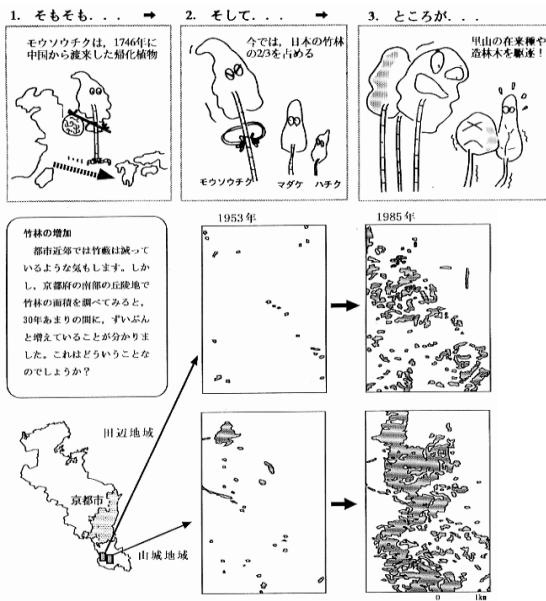


里山がタケに占領される？

モウソウチクの履歴...



タケノコが増えるのはいいけれど...

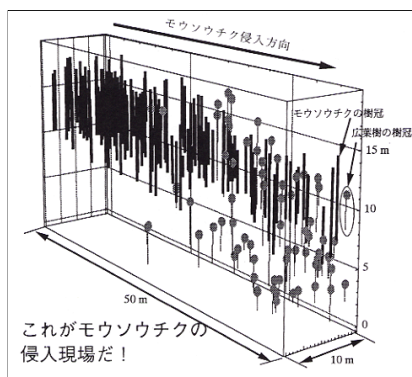
二ホンで最も普通にみられるタケ、ふだん口にするタケノコはモウソウチクです。モウソウチクは1700年代に中国から渡来した帰化植物なのですが、タケノコ栽培のために、西日本各地に広く植栽されました。近年は、輸入タケノコなどにおかれて多くのタケノコ畑は放置され、また宅地やゴルフ場などの造成で竹林は減少していると考えられていました。ところが、最近の研究で、人での入らなくなった竹林は、自然に分布を広げていることが分かったのです。

上の図では、京都府の山城町と田辺町の三十数年間の竹林分布の変化で、明らかに面積が増加しています。そのうち1970年頃までは、まだ人手によって植えられていたことが多いようですが、それ以後は地下茎を伸ばして周囲の雑木林に侵入し、自然に分布を広げていると考えられます。



スギの造林地に侵入するモウソウチク（写真中央の、色の淡い部分がモウソウチク）

それでは、モウソウチクがどのように森林に侵入しているのでしょうか？ 京都府南部でタケが活発に分布を広げている場所で調査してみると、この地域では森林の樹高が低く、タケの樹冠が広葉樹の樹冠よりも高い位置にあることが分かります（下図を参照）。



一般に森林の中で広葉樹が大きくなるには長い時間が必要ですが、モウソウチクはタケノコの伸長という形でほんの数か月で他の広葉樹よりも高い場所に葉を展開することができます。このような性質の違いからタケと広葉樹が混生している場所では、光をめぐる競争という点で圧倒的にタケが有利で、多くの広葉樹が枯死していました。また、すでにタケが優先している場所では広葉樹の稚樹は生育できないようです。

このような有利な性質を維持するためにモウソウチクは光合成産物のかなりの部分を根茎の更新や維持に割り振っているということも分かってきました。

このような竹林の拡大は、西日本各地の里山で観察されています。確かに、美味しいタケノコが食べられるのはいいのですが、単純に喜んでばかりはいられません。周囲の雑木林に生育・生息する貴重な動植物が絶滅することを危惧する声もあります。上段の写真のように、スギやヒノキの植林地にタケが侵入して、造林木を枯らしてしまう例も見つかっています。今後は、分布拡大の詳細な把握や将来の予測を行い、周囲の生態系との調和をはかるための調査・研究を進める必要があります。